

中村 明教授 年譜

- ◎ 敬称略 ☆ 太字は編著書（検定教科書関係および編集のみの場合は除く）
★ 斜体字は論文

- 1935年 9月9日、山形県鶴岡市荒町（現在の山王町）34番地に生まれる。湯治場で覚えた将棋が好きになり、就学前に近所の大人たちを相手に指す。
- 1942年 4月、鶴岡市立朝陽第三小学校に入学。絵を描くのが好きで相撲が得意。
- 1945年 春頃に一時疎開。時折、分校に通う。この頃に両親が離婚か。
- 1947年 4月、学区変更で鶴岡市立朝陽第一小学校に転校。冬、病気で長期欠席。
- 1948年 3月、欠席のまま同小学校を卒業。4月、鶴岡市立第二中学校に入学。10月頃より通学開始するも、数学など皆目わからず。
- 1951年 3月、約10ヵ月の空白が半々に分かれた関係か、正規の年限で同中学校を卒業。4月、山形県立鶴岡高等学校に入学。夏休み、学生時代の渡部昇一のちの上智大学教授に早朝の個人教授を受ける。秋頃から中村利助教諭の自宅で無料の数学の発展教育を受け、数学クラブに所属。この年、NHK 鶴岡放送局のラジオの鼎談に出演。
- 1952年 4月、名称変更により鶴岡南高等学校所属となる。明治期の「文学界」同人であった戸川秋骨・馬場孤蝶の子孫にあたる戸川・馬場両教諭に国語の授業を受ける。
- 1954年 代々荘内藩酒井家の御典医であった家系により医学部をめざすも某国立大学の受験に失敗。一時予備校に通う。三百年近く続いた鶴岡の家屋敷を売却することとなり、1冊の参考書も持たずに夏頃しばらく帰省し、故郷に名残を惜しむ。小宮豊隆の『夏目漱石』を読み、権威に阿ない漱石の人間性に惹かれて文学へと方向転換。
- 1955年 4月、早稲田大学第一文学部国文学専修に入学。6月、クラス雑誌『樹海』発刊、創刊号に「ふるさとの人々」を発表。窪田章一郎教授の紹介で『まひる野』9月号に短歌を4首、10月号に2首掲載。12月、『樹海』2号に「断想」、「六ツの呆話」、「廢句」を発表。
- 1956年 この頃、先輩・友人と同人雑誌を企画し、構想を練るため新宿を飲み歩くも企画実現せず。6月、『樹海』3号に「詩二題」、創作「芸者の死後」を発表。現代文学研究会に所属し、のち自民党幹事長となる加藤紘一の兄を識る。中村俊定教授の紹介で先輩たちと芭蕉の七部集を読む。秋、『樹海』4号に創作「頼子について」を発表。
- 1957年 4月、服部嘉香教授の定年退職により、修辞学の担当のちにお茶の水女子大学学長となる波多野完治に交代。講義内容の文章心理学を知り興味を抱く。6月、『樹海』5号に創作「鹿一T. S. に捧ぐ」を発表。12月、『樹海』6号に創作「ルビー」および短文「好きなもの」を発表。
- 1958年 11月、波多野完治の推挽により、〈講座コトバの科学〉第5巻『コトバの美学』（中山書店）に最初の論文「コトバの美とカゝ句読点の心理学」を発表。この頃、柳田泉教授を三鷹市深大寺の自宅に訪ねる。
- 1959年 3月、同学部を卒業。卒業論文の主査波多野完治、副査岡一男。同月、『樹

- 海』卒業記念号に「稲妻の文学—川端美の成立から」、「松本よい子子守唄」を発表。4月、早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻に進学。指導教授時枝誠記。同期はのちの玉川大学教授金井英雄のみ。翌年岩淵匡が入学して演習に加わる。ほかに、のちにハワイ大学で言語学を講じた宣教師のデイル・クラウリーが聴講生として同席、杉本つとむ・秋永一枝も時折顔を出した。この頃、遠藤周作『おバカさん』のガストンのモデルというジョルジュ・ネラン神父の日本語の文章の添削を始め、以後約20年続く。8月、『読書科学』11号に最初の学会誌掲載論文「*川端康成における人物描写*」(非会員のため波多野完治との共同執筆の形とする)を発表。11月、のちに妻となる人の父 久保田梅夫 死去(享年52)。
- 1960年 小林英夫教授の言語学特殊講義を履修。のちのプリンストン大学教授牧野成一、早稲田大学教授となる小黒昌一を識り、3人で小黒の下宿で定期的に読書会を開く。また、小黒らと文学作品の英訳を試みる。
- 1961年 学習塾の講師となり、のちに私塾を開き、数年続ける。
- 1962年 9月、国際基督教大学語学科非常勤助手となり北條淳子担当の授業を1コマ見学後、自ら日本語教育の授業を行う。
- 1964年 3月、大学院修士課程を修了。修士論文の主査時枝誠記教授、副査岡一男教授・辻村敏樹教授。4月より国際基督教大学語学科の専任助手となる。
- 1965年 9月19日、同僚の久保田妙子と結婚。媒酌人に波多野完治・勤子夫妻。乾杯発声は時枝誠記教授。大日本武徳会弓道十段吉田能安会長やネラン神父ら列席。横綱柏戸優勝。信州の霧ヶ峰・高遠などを旅し、杉並区西荻北2-28-12の大竹家の離れを借りて新居とする。
- 1966年 2月、吉田道場の早朝の寒稽古に通う。3月末、国際基督教大学の助手を退職し、日本語教育の仕事から離れる。4月、東京写真大学(現 東京工芸大学)専任講師として工学部に所属、「文学」を講ずる。この頃、弓道三段の免状を受ける。
- 1967年 3月、『文体論研究』11号に「『*東洋の秋*』の文章」を発表。同月末、わずか1年で東京写真大学を退職。4月、国立国語研究所員。文部教官の身分となる。国語教育研究室に配属。武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科非常勤講師(～1977.3)。10月、筑摩書房の『言語生活』誌の〈目〉欄を担当(～翌年3月)。
- 1968年 4月頃、東久留米の公務員住宅に移る。8月、『言語生活』に〈わたしの読んだ本〉浜田健二『放送文章』を発表。12月、『国語研究』26号(國學院大學)に「*連接方式から見た文体の側面*」を発表。同月30日、長男誕生、友と命名。
- 1969年 1月、『言語生活』に「*川端文学における比喩表現*」、3月、『表現研究』9号に「*直喩をあらわす言語形式と対比関係についての一考察*」を発表。4月頃、話しことは研究室に転属。6月、『文体論研究』14号に「*平均文長の諸相—川端康成における一つの試み*」を発表。同月、『言語生活』の〈座談会〉「日本語の敬語はむずかしいか」の司会を務める。7月、『言語生活』に〈わたしの読んだ本〉外山滋比古『修辭的殘像』『近代読者論』、8月、明治書院の『月刊 文法』に「誤りすれすれ一梶山季之・黒岩重吾・佐賀藩」、〈新刊紹介〉江藤淳『作家は行動する』を発表。11月27日、調布市若

- 葉町の武者小路実篤邸（現 実篤記念館）を訪問。
- 1970年 1月、『国立国語研究所年報』20に「中学校の教科書における漢字の出現状況」を報告。同月、『言語生活』に〈書斎訪問〉11「武者小路実篤—この道より我を生かす道なし」および〈録音器〉「書道くらぶ」を發表。2月、『月刊 文法』に「*文体印象の分析*」、日本国語教育振興協会の『日本語研究』創刊号に「*表現における日本語らしさについて*」を發表。4月、『読書科学』47・48号に「*川端文学の方法(1)—人物表現の特質*」、『言語生活』に〈録音器〉「ただいま日本語授業中」を發表。7月、小金井市東町1丁目23番地18号に家を新築して移り住み、現在に至る。8月、『言語生活』の合評「このごろの絵本」に参加。9月、『表現研究』12号に「否定表現」を發表。同月、『国立国語研究所年報』21に「現代語の文法の研究—文体と文法の関係」を報告。同月22日、葉山町堀内の堀口大学邸を訪問。11月、『言語生活』に〈書斎訪問〉21「堀口大学—難儀なところに詩は求めたい」を發表。12月、『言語生活』の〈座談会〉「体得か論理か」の司会を務める。
- 1971年 1月、學燈社の『國文學』に「*CMとことば—キャッチフレーズの比喩的表現*」、『言語生活』に〈言語社会時評〉「現代語における漢字の役割」を發表。2月、『言語生活』に「*比喩とは何か*」、〈言語社会時評〉「名こそ個人のもの」を發表。3月、『読書科学』49・50号に「*川端文学の方法(2)—稲妻の文体の成立*」、『言語生活』に〈言語社会時評〉「こだわらずに書こう」を發表。同月、〈共著〉国立国語研究所報告36『*中学生の漢字習得に関する研究*』（秀英出版）を公刊。夏頃、船で八丈島に渡り、方言調査に参加。海が荒れ、帰路、三宅島に立ち寄る。11月4日、世田谷区成城の大岡昇平邸を訪問。12月、『言語生活』に〈言語社会時評〉「志賀直哉の死」を發表。
- 1972年 1月、『言語生活』に〈人とことば〉「大岡昇平」、〈録音器〉「日曜のティータイム」を發表。2月21〜23日、予備調査のため野元菊雄と鶴岡に滞在。同月、〈録音器〉「八丈の風」を發表。3月6〜15日、鶴岡市で本調査を実施のため鶴岡ホテルに滞在。＊調査結果の分析は1974年3月刊の『地域社会の言語生活』で報告。4月、日本語教育学会編集委員（～1985.7）『17〜56号担当』。同月より12月まで東京書籍の『教室の窓』のコラム〈ことばのフィールドノート〉を担当し、①「意味の輪郭」②「脱方言の難所」③「乱れの表現性」④「文意をきめるもの」⑤「現象的な意味と基本的な意味」⑥「ことばの体臭」⑦「待遇の表現」⑧「比喩の判定」を連載した。7月、『言語生活』に〈言語社会時評〉「川端康成自殺後の課題」を發表。この年あたりの夏頃か、今度は飛行機（40人乗りのプロペラ機フレンドシップ）で八丈島に飛び、方言調査に参加。10月、『日本語教育』17号に「*国語辞典の情報対比*」を發表。同月、『表現研究』16号に「*表現の深さはどのように受けとられているか*」を發表。
- 1973年 3月、岡崎市での言語調査に参加。＊調査結果の分析は1983年3月刊の『敬語と敬語意識』で報告。5月、大修館書店の『月刊 言語』に「*文芸への文体論的アプローチ*」、『日本語教育』19号に「*表現の種類と待遇形式*」を發表、同号の「あとがき」執筆。12月、国立国語研究所の論集『ことばの研究』4集に「*接続詞の周辺—同帰をあらわす語の文法的性格*」を發表。このあたりで研究所の大きな組織変更があり、それに伴って言語行動研究部第一

研究室に配属となる。

- 1974年 5月、表現学会シンポジウム「文体はいかにして生成されるか」講師（於愛媛大学）。同月、明治書院の敬語講座『明治・大正時代の敬語』に「*白樺派の敬語*」を発表。6月、『國語學』97集に学界展望「*文章・文体*」を発表。7月、日本メール・オーダー社の世界大百科『週刊 アルファ』202号に「*比喩*」を発表。7月末、東京学芸大学で開催された文部省所轄機関バレーボール大会にオール文化庁のセッターとして出場し、二部優勝をはたす。9月、『表現研究』20号に「*文体の性格をめぐる*」を発表。
- 1975年 前年末より本年春頃にかけて大都市の言語生活の調査に参加。＊調査結果の分析は1981年3月刊の『大都市の言語生活』で報告。4月、言語行動研究部第一研究室の室長に昇格。9月、『国立国語研究所年報』26に「現代語の比喩表現の研究」を報告。10月20～24日、日立製作所本社で面接調査。＊この一連の敬語調査の結果の分析は1983年刊の『企業の中の敬語』で報告。11月14日、帝国ホテルに吉行淳之介を訪ねる。12月、『日本語教育』28号「あとがき」執筆。同月13日、杉並区清水町の井伏鱒二邸を訪問。
- 1976年 筑摩書房の企画で作家を歴訪、『言語生活』1～12月号にく現代文学のことは1～12」として連載。1月13日、御茶ノ水の山の上ホテルで小島信夫にインタビュー。2月5日、上野池の端の円地文子邸を訪問。3月5日、鎌倉市雪ノ下の永井龍男邸を訪問。同月25日、鎌倉市扇ヶ谷の里見淳邸を訪問。4月30日、小田原近郊下曾我にある尾崎一雄邸を訪問。5月、『表現学論考』に「*文体分析の方法*」を発表。同月21日、川崎市三田の庄野潤三邸を訪問。7月21日、赤坂のホテル・ニュージャパンで田宮虎彦にインタビュー。同月30日、八王子市子安町の瀧井孝作邸を訪問。8月20日に次男誕生、城と命名。同月27日、大塚護国寺裏の網野菊宅を訪問。9月、『国立国語研究所年報』27に「現代語の表現の文体論的研究」を報告。10月29日、鎌倉市雪ノ下的小林秀雄邸を訪問。11月15～18日、日立製作所の日立工場・多賀工場で面接調査を実施。12月、『日本語教育』に「研修の持ち分」を発表。
- 1977年 2月、国立国語研究所報告57『*比喩表現の理論と分類*』（秀英出版 ＊現在は大日本図書扱）を公刊。5月、明治書院の〈現代作文講座〉8『*文章活動の歩み*』に「*大正時代の文章活動*」を発表。6月、日立製作所の社内報『ばんばん』135号に「“ことばの乱れ”考」を発表。同月21～23日、日立製作所大阪営業所・大阪商品営業所・多賀工場京都分工場で面接調査。7月、三省堂の〈講座日本語と文化・社会〉3『*ことばと文化*』に「*比喩の中の日本人—身体語彙の用法から—*」、『日本語教育』33号に「*語の意味と固定連語の扱い*」を発表。同月、井伏鱒二『珍品堂主人』が中公文庫に入るに際し作者の推薦で「解説」を執筆。9月、〈現代作文講座〉別巻『*現代文範集*』に「論理文体を流れる硬質の抒情—大岡昇平『俘虜記』」を発表。12月、日経連の社内報『資料通信』に「鬼にちなむことわざ集」を発表。同月、〈編著〉『*作家の文体*』（筑摩書房）、『*比喩表現辞典*』（角川書店）を公刊。この年頃より、高等学校国語教科書編集委員〔明治書院〕（～2000頃）。編集委員在任中にく共編『*基本国語*』（新修版）〈新版〉〈最新版〉各Ⅰ・Ⅱ、『*精選国語*』（新修版）〈新訂版〉〈二訂版〉各Ⅰ・Ⅱ、『*高校生の国*

語』Ⅰ・Ⅱ、『精選新国語』現代文編Ⅰ・Ⅱ、同 古典編Ⅰ・Ⅱ、『国語表現』、『現代語』を刊行。

- 1978年 1月19日、企業内敬語の実態を探る一環として大阪市で店舗内面接調査を実施。3月、尾崎一雄『ペンの散歩』（中央公論社）に尾崎一雄との対談が「わが文学随感」として収録される。4月、『文學界』に「その日の作家たち」を発表。同月、実践女子大学文学部非常勤講師（～1980.3）。5月、『言語生活』の〈座談会〉「文体、このふしぎな闘い」の司会を務める。同月30日～7月18日、杉並区民講座「文章作法入門」を企画・担当。9月、『日本語教育』35号の「あとがき」を執筆。10月、〈共編〉『国立国語研究所三十年のあゆみ』を公刊。12月、『言語生活』の〈耳〉欄を担当。この年に小金井東小学校の『東小文集』に〈一年間の思い出〉「よろこび」を執筆。
- 1979年 3月、『名文』（筑摩書房）を公刊。4月、早稲田大学第一文学部非常勤講師（～1982.3）、相模女子大学文学部・短期大学非常勤講師（～1981.3）。同月、有精堂の〈論集 日本語研究〉8『文章・文体』に「文体の性格をめぐって」が収録される。インタビュー時の談話が同月17日、北海道新聞に〔著者訪問〕『名文』として掲載される。5月5日、図書新聞に〈書評〉週刊朝日編『私の文章修業』を発表。8月、『言語生活』に「おみくじの文体論」を発表。同月、『感情表現辞典』（六興出版）を公刊。9月、小学館の『総合教育技術』誌に「わが著書を語る『名文』」を発表。同月、『言語生活』の〈座談会〉「作文で人間の何がはかれるか」の司会を務める。
- 1980年 4月、早稲田大学第二文学部非常勤講師（～1981.3）、青山学院大学文学部非常勤講師（～1990.3）。同月、母 中村静尾 死去（享年79）。鶴岡市の蓮台院に何百年が続いた先祖代々の墓を、兄の住む岩手県軽米町に移す。5月、『言語生活』の大岡信・谷川俊太郎・辻邦生を招いた〈座談会〉「語感とイメージ」の司会を務める。同月、角川書店の『国語科通信』誌の〈座談会〉「辞書のすすめ」に出席。6月、三省堂の『美の知識』に「美の文章と文章の美」「美文から無文へ」を発表。同月上旬に渡米。ミドルベリー・カレッジでの日本語学校の教師を9週間務め、終了後、途中合流の家族とニューヨーク・ボストン・サンフランシスコ・ロサンゼルス・ハワイを旅して、8月末に帰国。8月、至文堂の『国文学 解釈と鑑賞』誌に「現代作家の表現意識—発言推敲の跡から」を発表。10月25日、小金井図書館で市民を対象に「悪文から名文へ」と題して講演。11月、『言語生活』に「文章作法書の展望」を発表。同月より翌年1月まで田川飛旅子主宰の句誌『陸』に〔比喩と映像1～3〕として「火のイメージ」「水のイメージ」「風のイメージ」を連載。この年かその前後に小沼研究室を訪問し、のちに小黒昌一の案内で小沼丹郎を初めて訪問、以後たびたび訪ねる。
- 1981年 1月、〈共編〉『角川新国語辞典』（角川書店）を公刊。第一企画の『マスコミュニケーションと広告』誌の創刊号に「新聞文章の性格」を発表。同月、『日本語教育』43号の「あとがき」を執筆。3月末、国立国語研究所を退職。4月、成蹊大学教授として経済学部へ所属。同月、外山滋比古編『ことばと教育』（講談社）に「谷崎潤一郎『文章読本』」と題する解説批評を発表。同月11日、図書新聞に〈書評〉大野晋・浜西正人編『角川類語新辞典』を発表。同月21日、北海道新聞に〈書評〉井上ひさし『私家版日本語

文法』を発表。5月28日、朝日新聞紙上に〈研究ノート〉「表現の摩擦」を発表。6月、『言語生活』に「文体としての視点」を発表。7月、〈共編〉『ないた赤おに一波多野完治氏とわたし』を刊行し、「茶色のベレー」を執筆。8月、日本翻訳家養成センターの『翻訳の世界』誌に「否定というレトリック」を発表。9～10月、岩波書店の『文学』に「文体の標準とは何か」を（上）（下）に分けて発表。9月5日～10月31日、朝日カルチャーセンター横浜教室にて「文体論」と題する連続講義。11月、明治図書の『実践国語研究』誌に「国語教育にのぞむ ことばの喜び」を発表、〈共編〉『国語表現ハンドブック』（明治書院）を公刊。

1982年 1月、東京法令出版の『月刊 国語教育』誌に「現代小説の文体」を発表。2月、明治書院の〈講座 日本語の語彙〉6『近代の語彙』に「夏目漱石の語彙」を発表。3月、〈共著〉国立国語研究所報告73『企業の中の敬語』（三省堂）を公刊。4月、早稲田大学大学院文学研究科非常勤講師（～1986.3）、早稲田大学専攻科非常勤講師（～1986.3 *専任として1990.3まで担当。）。5月、『早稲田文学』に〈手紙の博物誌〉「一手有情一小沼丹氏と将棋」を発表。8月、明治書院の〈講座 日本語学〉7『文体史 一』に「現代共通文の成立」を発表。10月、東京学芸大学教育学部非常勤講師（～1984.3）。同月、河北病院の看護専門学校非常勤講師（～1983.3）。第一法規刊行の『新作文指導事典』に「作文教育の研究とその課題—新修辞学的立場から」を発表。12月、大修館書店の『日本語教育事典』に「ことわざ類」を執筆。この年度にNHK ラジオ通信講座「高校国語Ⅰ」編集企画委員を務めるも自身の出演は辞退。のち、NHKの教育番組に2度テレビ出演を経験するが、コンテづくりや収録の在り方に制限が多く、それ以後、数局からの度々の勧誘をすべて辞退。

1983年 2月、『国文学 解釈と鑑賞』に〈学界寸評〉「文体論界に栄光あれ」を発表。同月、『言語生活』の〈座談会〉「文章の力と役割」に出席。同月、『日本語教育』49号に「日本語教育における“言語行動”の広がり」、明治書院の『日本語学』に「国語教育におけるレトリックの問題」を発表。3月、早稲田大学『専攻科文集』に「おことわり」を発表。4月、〔高等学校検定教科書〕『国語表現』（第一学習社）に、『名文』より「極楽寺門前（上林暁）」の一部が教材として採録。同月、『国語表現 指導資料』（明治書院）の「単元の解説」「推敲の着眼点」「表現の工夫」「文学作品の表現に学ぶ」「表現用語解説」を執筆し掲載。同月、明治書院の『古典と現代』52号の〈鼎談〉作品へのアプローチ「表現の指導」に参加、同誌53号で〈作者に聞く〉「母国語の力」として池田摩耶子と対談。同月、〈共編〉講座 日本語の表現6『表現の情報学』を公刊。5月、〈編著〉講座 日本語の表現5『日本語のレトリック』（筑摩書房）を公刊。その中の「レトリックの悦び」「文体の中にある表現技法」「日本語の表現」を執筆。6月、『国文学 解釈と鑑賞』に「太宰治の文体」を発表。7月、文春文庫版の安岡章太郎編『私の文章作法』の解説を担当。8月、『月刊 国語教育』に「よい文章の条件」を発表。同月、〈共編〉講座 日本語の表現3『話しことばの表現』を公刊。10月、『国文学 解釈と鑑賞』に「横光利一の文体と文章観」を発表。

- 1984年 1月、『国文学 解釈と鑑賞』に「『即興詩人』の文体」を発表。2月、山口県高校国語教育学会記念講演「スタイルとレトリック—文学作品に表現を学ぶ」(於 萩)の筆録が山口県高等学校教育研究会『国語』に掲載。同月、〈共編〉講座 日本語の表現2『日本語の働き』を公刊。3月、明治図書の『中学校国語指導法講座』5に「文学教材と文体の考え方」を発表。同月、文化庁の〈ことばシリーズ〉20の『文章の書き方』の〈座談会〉「文章の書き方をめぐって」に参加。4月、『言語生活』に「国語辞典の性格と個性」、『古典と現代』に「『モロッコ草の本』の表現的性格」を発表。この頃より表現学会監修『表現学大系』(教育出版センター)編集委員。5月、『國文學』に「『昭和輕薄体』は日本文学史に何を残すか」を発表。8月、『国文学 解釈と鑑賞』に「井上ひさしの言語世界」を発表。11月〈編著〉講座 日本語の表現4『表現のスタイル』(筑摩書房)を公刊。その中の「名文散策」「余情論」を執筆。12月、『国語教室』に「文法から文体を見る」を発表。同月、小金井市立東中学校の『かいほう』54号に「スミマセンはうつ向きかげんに」を発表。この年度に慶應義塾大学志木高校・名古屋女子大学の入試に著作から出題される。※予備校の模擬試験や受験雑誌等のテスト中に出題されたものは割愛。以降のこの種の記述においても同様。
- 1985年 1月、『日本語学』に「慣用句と比喩表現」、明治書院の『研究資料 日本文法』に「現代文の修辞」を発表。3月、早稲田大学『専攻科文集』に「年齢」を発表。4月、『日本語のレトリック』中の「日本人の表現」が〔高等学校検定教科書〕『国語Ⅰ』(学校図書)の教材として採用。同じ「日本人の表現」の別の箇所が〔高等学校検定教科書〕『総合国語Ⅰ』(角川書店)の教材として採用。5月、〈共編〉講座 日本語の表現1『日本語の働き』を公刊。6月、『日本語学』に「比喩の分類に関する問題抄」を発表。7月、『日本語教育』の「あとがき」を執筆。9月、『言語生活』に「文章読本と文法」を発表。11月、『国文学 解釈と鑑賞』に「太宰治の表現」を発表。12月、『木太刀』に俳句が1句掲載。この頃、国語学会キーワード委員。
- 1986年 1月、『國文學』に〈レクチュア〉「日本語レトリック道場」を発表。3月、『専攻科文集』に「静かになった後で」を発表。同月末、成蹊大学を退職。4月、早稲田大学教授として語学教育研究所に所属。同月、〔高等学校検定教科書〕『国語Ⅱ』(大修館書店)の教材「表現を選ぶ」を書き下ろす。同月、『表現学論考 第二』に「文体論のための表現分析ノート」、NHK学園の雑誌『文章設計』1号に〈名文の散歩道 1〉「井伏鱒二『鯉』」を発表。同月、『木太刀』に俳句が2句掲載される。5月、『わせた国文ニュース』に「新任教員自己紹介」を執筆。5月17日、文教大学国文学会で「文体の風景」と題して記念講演(於 越谷)。6月、教育出版センターの『表現学大系』1巻に「心情の表現」、『文章設計』2号に〈名文の散歩道 2〉「永井龍男『道徳教育』」を発表。同月16日、都立教育研究所で都立高校国語教師を対象に「日本語文章表現の特色」と題して講演。8月、『文章設計』3号に〈名文の散歩道 3〉「小沼丹『喧嘩』」を発表。10月、語学教育研究所の『ILT NEWS』80号に「早稲田ラブソディー」を発表。同月、『木太刀』に俳句が2句掲載。10月9日、『早稲田ウィークリー』に〈インタビュー〉「文章を斬る」を掲載。11月、『國文學』臨時増刊号【文章表現セミナーA-Z】

- を編纂し、「いい文章の書き手になるには」を発表。同月、『国文学 解釈と鑑賞』別冊【現代文学研究 情報と資料】に「**文体論の視角**」、リョービ印刷の『アステ』誌4号に「**句読点の表現効果**」を発表。
- 1987年 1月、〈共編著〉『**日本文芸鑑賞事典**』全20巻（ぎょうせい）（～1988.6）を公刊し、各巻の「作品中の言葉の用例」を執筆。1月17日、早稲田大学国語教育学会で記念講演（於 小野講堂）。2月、『木太刀』に俳句が2句掲載される。3月、『語学教育研究所紀要』34号に「**国語辞典の情報効率**」、『専攻科文集』に「蛙のはなし」を発表。4月、『言語生活』に「**忍をめぐる比喩表現**」を発表。6月、国語教育学会の『国語教育研究』7号に講演筆録「**視点映す表現**」が掲載される。11月、『国文学』臨時増刊号【日本人のための 日本語セミナー】を編纂し、「**表現の“間”**」を発表。同月、学生生活センター刊行の『新鐘』37号に〈私の薦めるこの一冊〉「小沼丹『藁屋根』・福原麟太郎『チャールズ・ラム伝』・庄野潤三『陽気なクラウン・オフィスロウ』」を執筆。12月、夏の公開講座（於 大隈小講堂）の講演内容を、『講座日本語教育』23分冊に「**語感のひろがり**」と題して発表。
- 1988年 1月、早稲田大学大学院『文学研究科紀要』33輯に「**言語表現における視点の問題**」を発表。3月、『専攻科文集』に「**円熟**」を発表。4月、語学教育研究所より日本語部門が独立して日本語研究教育センターが発足し、所属変更となる。同月、〈共編著〉『**外国学生用 日本語教科書 上級Ⅰ**』（早稲田大学日本語研究教育センター）および『**外国学生用 日本語教科書 上級Ⅱ**』（早稲田大学日本語研究教育センター）を公刊。〔高等学校検定教科書〕『**国語Ⅰ**』（新版）（学校図書）に「日本人の表現」が教材として掲載される。5月、大修館書店の『日本語百科大事典』に「**比喩表現**」「辞書の評価」を発表。この頃、徳島県高校国語教育学会で記念講演（於 池田高校）。同年（奥付に刊行月の記載なし）、明治図書刊『**国語教育研究大事典**』に「**比喩**」「**波多野完治**」「**小林英夫**」を発表。
- 1989年 2月、『国文学 解釈と鑑賞』に「**有島武郎の文体―『或る女』の比喩表現から**」を発表。3月、桜楓社の『日本語概説』の「**表現と文体**」と題する章を分担執筆。同月、『専攻科文集』に「『**立春の卯**』余閑の余分」を発表。7月、『国文学 解釈と鑑賞』に「**小説の文章―近代から現代へ**」を発表。8月6日より初めての欧州観光旅行（～8.17）。フランス・イタリア・スイス・イギリスを歴訪。9月、『表現研究』に招待論文「**文体のスケッチ―小沼丹『珈琲の木』の表現風景**」を発表。
- 1990年 2月、明治書院の〈講座 日本語と日本語教育〉『日本語の語彙・意味（下）』に「**比喩と発想法**」を発表。3月、第一文学部文芸専修の『蒼生』に「ミドルベリー日本語学校」、『専攻科文集』に「**知らぬが仏**」を発表。同月8日、読売新聞本社で「**文体の中の表現技法**」と題して講演（こだまの会）。4月、大学院文学研究科に日本語日本文化専攻が新設され、中村研究室がスタート。同月、〈共編著〉『**外国学生用 日本語教科書 中級Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**」の各試行版を発行。同月、『国文学 解釈と鑑賞』に「**島崎藤村の文体―『破戒』『新生』の人体描写の一側面**」を発表。6月10日、表現学会で「**笑いのレトリック**」と題して記念講演（於 広島大学教育学部）。7月、小学館の『**波多野完治全集**』1巻に〈著作解説〉『**文章心理学**』を

表。『表現研究』52号に「笑いについて」を発表。12月、小学館の〈群像日本の作家 16〉『井伏鱒二』に『作家の文体』から〈作家に聞く〉「遊」として再録。同月、『国文学』臨時増刊号【文章作法便覧】を編纂し、「発想の光る文章—思考と表現」を発表。

1991年 2月、NHK ブックス『文章をみがく』（日本放送出版協会）を公刊。3月、読書新聞に〈私の新刊〉『文章をみがく』を執筆。同月、『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』（岩波書店）を公刊。4月、〈共編著〉日本文体論学会編『文体論の世界』（三省堂）の編集幹事を務め、「文体における個別性と普遍性」を発表。6月、アルクのインタビューを受け、『月刊 日本語』誌に「いい文章を書くために」として掲載。8月13日、都立教育研究所で都立高校の国語教師を対象に「文学作品の表現」と題して講演。9月、講談社文芸文庫の小沼丹『懐中時計』の「作家案内」を執筆、「著書目録」を作成。10月、早稲田大学国文学会理事（～1993.10）。12月、妻の母 久保田富美子 死去（享年83）。この年度に國學院大學の入試に著作から出題される。

1992年 3月、早稲田大学国文学会の『国文学研究』106号に「要求表現における待選形式の呼応」、岩波書店の『阿部昭集』11巻の月報に「文体のことなど」を発表。同月、〈共編著〉『日本語史の諸問題』（明治書院）を公刊し、「文体概念の変遷」を発表。4月、お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師（～1994.3）。6月、『国文学 解釈と鑑賞』に「小林秀雄の文体」を発表。7月、『日本語センター報』8号に〈新刊自己紹介〉『文章をみがく』『日本語レトリックの体系』を執筆。8月、明治書院の応用言語学講座4『知と情意の言語学』に「喜怒哀楽のことば」を発表。8月2日、第二次の欧州観光旅行（～8.15）。フランス・ベルギー・ドイツ・オーストリア・ハンガリーを歴訪。10月、岩波書店の〈シリーズ授業 2〉『国語Ⅱ』に「言語感覚をみがく—表現論の立場から授業を批評する」を発表。11月、『国文学 解釈と鑑賞』に「森鷗外の文体—感情表現・比喩表現を漱石と比較する」を発表。同月16日、日本語研究教育センター教務主任（～1944.11）。同月、『表現力を高める辞典—思いを伝えることば2000』（PHP研究所）を公刊。12月、冬学期より国際基督教大学語学科非常勤講師（～2006.3）

1993年 1月、『日本語学』に「近代文学に見る感情表現のひろがり」、『表現学論考—第三』に「個人文体史—近作を透して小沼丹揺籃期を視る」を発表。2月、近代語学会の『近代語研究』第九集に「近世笑話の表現」を発表。同月、〈共編著〉『集英社 国語辞典』（集英社）を公刊し、「編者のことば」「凡例」「日本語の表現」を執筆。同月、集英社の『青春と読書』に「辞書の夢、夢の辞書」を発表。同月、『現代文解体新書』（駿台文庫）に『比喩表現辞典』からの抜粋が掲載される。3月、旧著『名文』に加筆して、ちくま学芸文庫版『名文』（筑摩書房）を公刊。4月、文部省への申請に名を列ねた近畿大学大学院文芸学研究科が認可され、非常勤講師（～2003.3）となる。同月、『集英社図書目録』に「読書の三つの楽しみ」を発表。5月、『感情表現辞典』（東京堂出版）＊六興出版刊行本の新装版を公刊。6月、〈監修〉『日本語使い分けのための 類語活用小辞典』（PHP研究所）を

公刊。7月、『日本語学』に〈新刊自己紹介〉『集英社 国語辞典』を執筆。7月26日、よみうりホールで開かれた近代文学館主催の文学教室で井伏鱒二について講演。9月、大阪大学文学部非常勤講師《集中講義》。同月、『日本語学』に「**省略の文体論**」を発表。同月、岩波セミナーブックス『**日本語の文体一文芸作品の表現をめぐる**』（岩波書店）を公刊。10月、早稲田大学国文学会評議員（～現在）。11月、『國文學』臨時増刊号【日本語の現在—現代語、何が問題か？】を編纂し、巻頭に「**日本語が失ったもの**」を発表。12月、『武蔵野文学』41号に「**井上ひさし『自家製 文章読本』論**」を発表。この年より一ツ橋文芸教育振興財団評議員（現在に至る）。

1994年 1月、『日本語センター報』に〈新刊自己紹介〉『感情表現辞典』『日本語の文体』を執筆。3月、〈共編〉『小論文ノート（大学受験用）』（三省堂）を公刊。4月、〈共編著〉〔高等学校検定教科書〕『精選 新国語Ⅱ』『現代文編』（明治書院）に「文学に学ぶ修辞 表現と効果」を執筆。6月、『国文学 解釈と鑑賞』に「**井伏鱒二の文体—晩年の作に地蔵の心をたどる**」を発表。同月14日、群馬県高校国語教育学会で「日本語の語感」と題して記念講演（伊香保泊）。7月、講談社文芸文庫の小沼丹『小さな手袋』の「**人**と**作品**」を執筆、「年譜」「著書目録」を作成。8月、中公新書『**センスある日本語表現のために一語感について**』（中央公論社）を公刊。11月16日、日本語研究教育センター所長（～1998.11.15）。同月29日に山形新聞にくわたしのやまがた論 8>「古い町の伝統」、同紙30日にくわたしのやまがた論 9>「昔の町名」を分載。12月、『國文學』臨時増刊号【日本語の常識 Q&A】を編纂し、巻頭の「日本語の四季」のほか、Q&A「**表現・文体**」を発表。同月、三省堂刊の『日本文学史の発見』に「**志賀直哉は名文を書いたか**」を発表。この年度に甲南大学の入試に著作から出題される。

1995年 1月、文芸同人雑誌『航跡』第1号発行（年刊 2005年の第12号で終刊）。「**発刊のことば**」および創作「ミドルベリー、夏」を執筆。3月、『国文学研究』115集に〈書評〉野村雅昭『落語の言語学』を発表。同月、『日本語センター報』に〈新刊自己紹介〉『センスある日本語表現のために』を執筆。4月、『**感覚表現辞典**』（東京堂出版）を公刊。同月、山梨文学館の井伏鱒二展に際し『**風貌姿勢**』別冊に「**井伏さんと私**」といった内容の小文を寄せる。同月、〔高等学校検定教科書〕『新編 現代文Ⅰ』（大修館書店）に「**表現を選ぶ**」が教材として採録される。同月、大学院文学研究科日本語日本文化専攻主任（第一次 ～1999.3）。5月、ちくま新書『**悪文—裏返し文章読本**』（筑摩書房）を公刊。6月、NHK 庄内教室の文章講座を担当。同月26日、母校の鶴岡南高校で全校生徒を対象に「**思考と表現**」と題して講演。7月、『**比喻表現辞典**』（増補版）（角川書店）を公刊。7月17日、山形新聞に「**ことばの乱れ考（上）—ら抜き現象の浸透**」、同紙同月18日に「**ことばの乱れ考（下）—たかが「ら抜き」ではない**」を連載。7月22日、信濃追分の谷川のほとりに新築成った山小屋（通称「せせらぎ亭」）に家族全員初めて滞在。8月、〈監修〉『**日本語表現に自信がつく本**』（PHP 研究所）を公刊。マガジンハウスのインタビューを受けて、9月、『**ダカーポ**』誌に「**名文と悪文のちがいは何か**」として掲載される。同月、『日本

語センター報」に「ふたつの眼一卒業生を送ることば」、およびく新刊自己紹介〉『感覚表現辞典』『悪文』を發表。10月、岩波書店の『幸田文全集』11巻の月報に「しゃきつとした文章」を發表。11月、『日本語学』巻頭に「レトリックの現在—『坊っちゃん』の表現構造と伝達効果」を發表。12月、『月刊 言語』に「*比喩表現と慣用表現*」、早稲田大学の『Wact』誌に「手紙の風景」を發表。12月2日、岡山大学における法とレトリック研究会で「日本語レトリックの方法と効果」と題して講演。この年度に関西大学・日本大学短期大学部の入試に著作から出題。

1996年

1月、『蘇る』誌に「もらって嬉しい手紙の書き方」、『航跡』2号に「ほくら」を發表。3月、『文章プロのための 日本語表現活用辞典』（明治書院）、〈共編〉『小論文ノート（推薦・就職試験用）』（三省堂）を公刊。同月、『表現研究』63号に「今井文男氏に詫げる件」を執筆。同月、〈講演筆録〉「日本語レトリックの方法と効果」（法とレトリック研究会）が出る。4月、山梨英和短期大学非常勤講師《夏期集中講義》（～2003.3）。同月、中島昭『演習・文章表現』（門土社総合出版）に『日本語の文体』の一部が「日本語と英語」と題して再録される。5月、『早稲田フォーラム』73号に『『改革』の聲音』を發表。6月、『たとえことば辞典』（東京堂出版）を公刊。同月、『表記』13号に「*諸語のレトリック*」を發表。同月、NHK 庄内教室にて「あじわいのある文章へ」と題して講義。8月、横綱柏戸の鏡山部屋より初めて大相撲の番付届く。9月、『日本語センター報』に「浅酌微吟」とく新刊自己紹介〉『たとえことば辞典』を執筆。この年より鶴岡総合研究所研究顧問〔山形県鶴岡市〕（現在に至る）。この年度に茨城県立高校・中央大学の入試に著作から出題。

1997年

1月、『日本語学』に「ユーモアの文体論」、『群像』に「なつかしき夢—小沼文学の風景」を發表。同月、『住友マネジメント』誌にく著者と1時間〉『センスある日本語表現のために』が掲載される。2月、『文章力をつける』（日本経済新聞社）を公刊。同月、『文学研究科紀要』42輯に「『坊っちゃん』の人物描写」、『航跡』3号に創作「卒塔婆」を發表。3月、旧著を大幅増補して、ちくま学芸文庫版『作家の文体』（筑摩書房）を公刊。同月、『人物表現辞典』（筑摩書房）を公刊。同月、『早稲田文学』に「小沼文学の笑いと郷愁—文体について」、『国文学研究』121号にく書評〉野村雅昭『落語のレトリック』を發表。5月、『文章の泉』（おうふう）に『名文』の一部が再録される。6月、中央公論社の雑誌『GQ』に『人物表現辞典』に関する〈インタビュー〉が「文章表現のヒントを満載した実用性高い一冊」という見出しの記事として掲載される。7月1日、日本経済新聞に「人物描写に作家の個性」を發表。9月、ちくま新書『文章工房』（筑摩書房）を公刊。9月頃、『日本語センター報』に「休演」を執筆。10月18日、國語学会で「文体と表現をめぐる断想」と題して記念講演（於 山形中央公民館ホール）。予稿集に「*文体と表現をめぐる断片*」として講演内容の一部を掲載。11月、『航跡』4号に創作「鹿」を發表。12月、『早稲田学報』に『『人物表現辞典』への道とその周辺』を發表。前年度からこの年度にかけて電通リサーチに協力してまとめた監修者からのコメント「原子力広報における表現上の心構え」が、九州電力の『原子力広報／表現ガイドブッ

ク』に掲載される。この年度に富山県立高校・中央大学・東海大学の入試に著作から出題される。この年から翌年に日本文藝家協会会員となって今日に至る。

1998年 1月27日、藤沢周平の文体に関する文章が山形新聞に「**藤沢周平の魅力 抑制の利いた潔い文章**」という見出しで掲載される。3月、文化庁の〈新「ことば」シリーズ 7〉『文章表現の工夫』に「**現代の文章におけるレトリック**」を発表。4月、〔高等学校検定教科書〕『新編 現代文』（三省堂）に「日本語の表現」の冒頭部分が「雨の日の車内アナウンス」と題して教材に採られる。5月、『井伏鱒二全集』第21巻の月報に「**テープ供養**」を発表。6月、『日本語研究教育センター紀要』11号に「**井伏小沼八百番手合—文体対比のための覚書**」を発表。同月、日本文体論学会代表理事（～2000.6）。8月3日、豪州のケアンズに観光旅行〔西尾圭子・カッケンブッシュからの招待〕（～8.7）。11月、ソフィアブックス『**名文・名表現 考える力 読む力**』（講談社）を公刊。同月、岩波書店の『図書』誌に「**勁直のリズム—志賀直哉**」を発表。同月27日、愛知県高校国語教育学会で「表現の方法と効果—文学作品のセンスとユーモアをめぐる」と題して記念講演（於 名古屋 愛知女性総合センター）。12月、『航跡』5号に創作「**街角の秋**」を発表。この年度に長野県立高校の入試に著作から出題される。

1999年 3月、〈編〉表現学大系各論編15『**現代小説の表現 二**』（教育出版センター）を公刊。同月、『国語教育研究誌』35号に〈講演筆録〉「**文章表現の方法と効果**」が掲載される。同月、鶴岡南高校の同窓会発行の『鶴翔』誌に「**旬花酒湯そして情**」を発表。同月、中村研究室の機関誌『**回帰線**」を発行し、1号に「**ゼミに歴史あり**」を発表。6月、早稲田大学国語学会代表委員（～2001.5）。同月12日、日本文体論学会（於 カリタス女子短期大学）のシンポジウム「『**雪国**』の文体」の司会を務める。同月、『**名文作法**』（PHP エディターズ・グループ）を公刊。7月、『**表記**』16号に「**省略と助詞の働き**」を発表。10月21日、神奈川県立教育センターで市民を対象に「**日本語の語感のひろがり**」と題して講演。11月、〈編〉表現学大系各論編16『**現代小説の表現 三**』（教育出版センター）を公刊。同月、〈共編〉『**日本語学と日本語教育**』（明治書院）を公刊。うち森田良行宛「**献呈のことば**」を記し、『**坊っちゃん 対話録**」を発表。同月、文芸同人誌『**海月**』創刊2号に「**銀座あちこち**」を発表。同月、『**わせた国文ニュース**』に審査委員長として「**空穂賞のお知らせ**」を執筆。12月、〈共編＝代表編者〉『**テキスト 日本語表現**』（明治書院）を公刊。うち「**編者のことば**」「**とびらエッセイ**」および第I章「**表現のよこび**」を執筆。同月、『**文藝家協会ニュース**』580号に「**誤算**」、『**航跡**』6号に創作「**またたく**」「**徳川宗賢氏に詫げる件**」を発表。この年度に広島県立高校の入試に著作から出題。

2000年 2月、『**文学研究科紀要**』45輯に「**小沼丹 太宰さんもの**」の**文体序説—「黒と白の猫」と「懐中時計」における主述関係の調査から**」を発表。4月、大学院文学研究科日本語日本文化専攻主任（第二次 ～2003.3）。同月、ちくま学芸文庫『**現代名文案内**』 *『**名文・名表現 考える力 読む力**』の再編補筆版（筑摩書房）を公刊。5月、『**徳川宗賢さんの思い出**』に「**徳川宗賢氏に詫げる件**」を掲載。6月、『**国文学 解釈と鑑賞**』に「**横光利一の文**

- 体一同世代作家との対比調査から」を發表。9月、〈共編著〉『集英社 国語辞典』第二版（集英社）を公刊。「新しい時代に向けて」（第二版編者のことば）を新たに執筆。10月2日、The Daily Yomiuri に『集英社 国語辞典』第二版に関する〈インタビュー〉記事が[Dictionary editor's work is never done]という見出しで掲載される。10月25日、山形新聞に〈わが心の作品〉小宮豊隆『夏目漱石』を發表。11月、〈編著〉『現代日本語必携』[別冊國文學]（學燈社）を公刊、「日本語の芸術」を執筆。12月、ちくま新書『日本語案内』（筑摩書房）を公刊。同月、『航跡』7号に創作「羽黒の鐘」を發表。この頃より高等学校国語教科書統括委員〔明治書院〕に昇格。以降、統括委員として『新編 国語総合』『精選 国語総合』『新編 国語表現』『精選 国語表現』等を刊行。この年度に山形県立高校・錦城高校・埼玉高校・水戸葵陵高校・中央大学の入試に著作から出題。
- 2001年 1月、『日本語学』に〈新世紀の日本語を考える〉「彼と彼女のなれそめは」を發表。4月、アルクのインタビューを受けた際の談話が『月刊 日本語』誌に〈著者に聞く〉『日本語案内』として掲載される。8月17日、青森県高校国語教育学会で「笑いのレトリック」と題して記念講演（於 黒石 松安閣）。10月、『日本文芸の表現史』（おうふう）に「井伏文体の胎動—『幽閉』から『山椒魚』へ」を發表。同月30日、尾道大学国語国文学会最後の大会で「日本語の笑い」と題して記念講演（於 尾道大学）。11月、明治書院の現代日本語講座2『表現』に「修辭体系と比喩」を發表。同月21日、大分県高校国語教育学会で「現代日本語事情—ことばのセンス」と題して記念講演（於 佐伯）。この年度に三重県立高校・横浜学園高校・聖パウロ学園高校・相愛高校・京都 精華女子高校・大阪女子学院高校・上宮高校・東北学院大学・國學院大學・関西大学の入試に著作から出題される。
- 2002年 1月、『航跡』8号に連載小説「ミドルベリー日本語学校」の第1回を發表。2月、『文章読本 笑いのセンス』（岩波書店）を公刊。4月、弘前大学教育学部非常勤講師《夏期集中講義》（～2004.3）。同月、『日本語研究教育センター紀要』15号に「吉野君と太夫さん—小沼丹自伝小説における視点の微差」を發表。5月、ちくま学芸文庫『文章作法入門』*『文章力をつける』の文庫化（筑摩書房）を公刊。10月、中公新書『日本語のコツ』（中央公論新社）を公刊。11月16日、ことわざ研究会で「日本語の比喩」と題して講演（於 武庫川女子大学）。同月21日、私立高校の国語教師を対象に「文章の技—悪文～名文」と題して講演（於 市ヶ谷 アルカディア）。12月、『手で書き写したい名文』（角川書店）を公刊。同月、近代語学会の『近代語研究』11集に「虚実皮膜の笑い—井伏鱒二初期作品の「うやむや表現」の諸相」を發表。この頃、〈監修〉『国語表現 活動マニュアル』（明治書院）を公刊。この年度に高槻中学・東海大学菅生中学・三重県立高校・京華女子高校・獨協大学の入試に著作から出題される。
- 2003年 1月、『航跡』9号に「ふるさと二題」および創作「ミドルベリー日本語学校2」を發表。3月、『文章の技—書きたい人への77のヒント』（筑摩書房）を公刊。同月、『文体論研究』49号に招待論文「井伏鱒二 初期作品の笑い」、朝倉日本語講座7『文章・談話』に「文章・談話のレトリック」を發表。4月、筑摩書房の『ちくま』誌に「感文一致のすすめ」を發表。6

月、『日本語学』の〈新刊クローズアップ〉『日本語のコツ』を執筆。同月11日、群馬県高等学校国語教育研究会で「ことばと笑い」と題して講演（於 前橋 上毛会館）。7月、〈共編＝代表編者〉『テキスト 日本語表現』＊ワークブック付 改訂版 函入（明治書院）を公刊。8月、『国文学 解釈と鑑賞』に「志賀直哉の文体再考」を發表。9月、父 中村茂雄死去（享年96）。10月、朝倉漢字講座3『現代の漢字』に「文学と漢字」を發表。この年度に中央大学杉並高校・開智高校・本郷高校・駿台学園高校・国府台女子学院高校・法政大学・滋賀女子短期大学の入試に著作から出題される。

2004年 1月、『航跡』10号に創作「ミドルベリー日本語学校3」を發表。2月、『文学研究科紀要』49輯に「小沼丹 随筆の笑い—比喩的・擬人的表現の連想を中心に」を發表。4月、山梨英和大学人間文化学部非常勤講師（夏期集中講義 ～2006.3）。5月、角川文庫版の夏目漱石『こゝろ』に「あらすじ」と「解説」、夏目漱石『坊っちゃん』、森鷗外『山椒大夫・高瀬舟・阿部一族』、中勘助『銀の匙』にそれぞれ「あらすじ」を發表。6月、角川文庫版の遠藤周作『海と毒薬』に「あらすじ」を發表。同月、〈共編〉『小沼丹全集』全4巻（未知谷）を公開開始、9月に完結。その第四巻に「小沼丹年譜」を作成して掲載。同月8日、2年ほど前に続き三浦哲郎邸を再訪。12月、『航跡』11号に創作「ミドルベリー日本語学校4～8」を一挙掲載。この年度に学習院高等部・日本大学豊山高校・専修大学附属高校・広島大学・東京経済大学・帝塚山学院大学・金蘭短期大学の入試に著作から出題。

2005年 3月、〈共編著〉『表現と文体』（明治書院）を公開。うち「文学と文体」を執筆。同月、『文藝春秋』臨時増刊号『言葉の力』に「絶妙の無駄—表現の奥の人影」を發表。同月24日、八王子の杜公園墓地A区5側10号に建墓（須藤石材 緑宝石）。4月、〔高等学校検定教科書〕『現代文Ⅱ』（大修館書店）に『日本語案内』の一部が「ニュアンスの文法」と題して教材に採用される。5月、『日本語学』に「日本語の比喩—研究の課題と夢をめぐる断想」を發表。7月、〈共編〉『小沼丹全集』補巻（未知谷）を公開。8月、角川文庫版の樋口一葉『たけくらべ・にごりえ』に「あらすじ」を發表。9月、『センスをみがく 文章上達事典』＊『名文作法』の増補再編索引付事典化（東京堂出版）を公開。同月、内容見本に「『三省堂 類語新辞典』の刊行にあたって」を執筆。同月7日、『三省堂 類語新辞典』の発行を控えての説明会を開き、名古屋のホテルキャッスルプラザで大型書店・取次の役員を対象に「日本語の地図」と題して講演。翌8日、同じ趣旨の講演を東京ドームホテルで実施。11月中旬、〈共編＝編集主幹〉『三省堂 類語新辞典』（三省堂）を公開。編集作業のほか、「序にかえて」「本辞典の編集方針と特色」「本辞典の引き方」「本辞典のきまり」を執筆。同月、尾崎左永子主筆の『星座』誌（かまくら春秋社）に〈巻頭随筆〉「幸田さんのオノマトペ」を、『短歌研究』誌に「文学の中の笑い—発想とその表現」を發表。12月、『航跡』最終12号に、同誌既発表の創作等のほか「藤沢周平の文体」「幸田さんのオノマトペ」「文学の中の笑い」を再録、「自筆年譜〈青春やや延長編〉」を新規掲載。同月、『航跡』誌1～12号が国立国会図書館に逐次刊行物として収蔵される。長年の禁を破ってテレビ出演し、

2006年

「怒る」と「叱る」の違いをTBSで説明（クリスマスに自宅で録画）。この年度に岡山県立高校・山口県立高校・静岡大学・高知大学・日本大学・大東文化大学・東京国際大学（3学部）の入試に著作から出題される。

1月、『日本語センターニュース』に「早稲田ラプソディーふたたび」を発表。2月中旬、『文の彩り一顔・姿・心を描く名表現』（岩波書店）を公刊。同月下旬、『青春と読書』誌（集英社）に「文字を選ぶゼイタク」を発表。文学学術院教授会での退任挨拶を書面にて送付し、土田委員長が代読。同月末、『漢字を正しく使い分ける辞典』（集英社）を公刊。同辞典の発行に際し、集英社神保町ビルにてヤフーブックスからのインタビューに応じ、3月1日に記事が画面上に掲載。同月中旬にも日経ネットから自宅でインタビューを受ける。この年度に日本女子大学付属高校・共立女子短期大学・京都外国語大学・奈良産業大学の入試に著作から出題。3月下旬頃、『早稲田日本語研究』に「随感　ゆりかごの小沼丹」を発表の予定。3月末、早稲田大学を定年退職。4月より山梨英和大学教授（特任）として週3コマの講義を担当のため石和温泉に一泊するほか、早稲田大学エクステンションセンターでオープンカレッジの講座「日本語と笑い」を担当の予定。5月、『わせだ国文ニュース』に「流される」を発表の予定。同じ頃に刊行予定の『日本語研究教育センター紀要』19号（退職記念号）に本年譜掲載の予定。

《掲載雑誌未詳》「手紙のセンス」

《実施時期未詳》府中市民を対象とした講演

川崎（座間？）市民を対象とした「現代日本語事情」と題する講演

《入試出題年度未詳》新潟県立高校／跡見女子大学　その他。

[2006年3月15日現在]